

随想 — 博物館のこれから —

館長 友野 澄雄

私は昨年4月、岡山県立博物館に勤務を命ぜられた。そして9か月あまりが経過した。この間に感じたことを記させていただく。

就任らい博物館関係以外の方に話をする場合、「世に博物館行きという言葉がございまして……」を話のいとぐちによく使った。それは「博物館行き」という言葉を、「もう役に立たなくなった物の行くところであり、時代遅れという意味」に解釈してのことであった。このことは世の一般の博物館に対する認識と大同小異であろうと思ったからである。

しかし私は、博物館が過去の遺物の収容所であり、単に過去を復元するためのものであるならば、多額の税金を使って公共団体が設置し運営することはあるまいと思う。

さて、就任して最も強く感じたことは、こうした博物館に対する誤解ないしは古い見方を改めていく効果的な方法はないものかということであった。

このようなことを思いながら月日は経過したが、昨年11月、国立民族学博物館創立10周年記念式典での梅棹館長の『博物館は未来をめざす』と題しての講演は、私にとって暗夜の海上に光る燈台の灯であった。失礼をも顧みず、その一部を引用させていただく。

「博物館の本質は単に過去を目指し、過去を復元するということではない。過去にあったもの、現に存在するものを新しい視点から新しい文脈に組み直して、未来に送り込む。これが博物館の仕事である。」「博物館が集めるものは物だけではない。物にまつわるあるいは物に直接関係のない情報こそが博物館の最も重要な収集の対象である。」

「博物館は……広く情報を収集し、転換しあるいは創造し蓄積された莫大な情報の中から正確で最高の知識を市民に提供する機関である。」「博物館は……市民の教養の場あるいは啓蒙のための装置ではない。博物館は市民の知性を

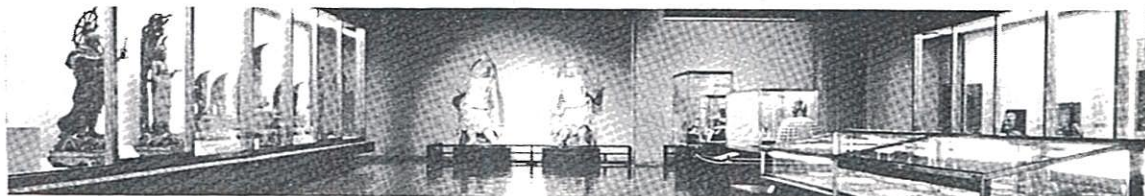
刺戟し、人間精神を挑発することによって、未来の創造に向わしめるための装置である。」

「展示の良し悪しはその博物館の運命を左右する。……現代のような豊かな社会においては、ちやちなものは見向きもされない。十分な費用と時間をかけて、現代そのものを表現しなければならない。」「物事は完成したと思ったらおしまい。完成感覚をもったら墓場の入口。新陳代謝が止まれば、それは死である。博物館にも完成ということはない。」等々であり、私が言葉としてまとめることのできなかったことを、適確に示していただいたことを感謝するしだいである。

岡山県立博物館は歴史博物館である。昭和59年度のテーマ展は『平賀元義』『備前焼の窯変とその源流』であり、特別展は『みち』であった。これらの展示は関係者のご協力もあり、無事終了し、いずれの展示についても高い評価をいただくことができたことを喜んでいる。しかし、より工夫し、現代に生きた展示をしたいと願うものである。

例えば、岡山藩に仕えた熊沢蕃山は治山治水に苦勞している。治山治水のためには農民に山の木は切るなどいいたい。しかし、山の木を切らなければ農民は生きていけない。この蕃山の悩みは、今地球全体が悩んでいることと同じだと思う。熱帯雨林の木が伐採されて先進工業国に送られている。自然保護の観点から木を切るなど叫んでも、熱帯雨林地域の人々は生きていくためには木を切らなければならないのだと思う。蕃山の悩みは、今グローバルな悩みとなっている。こんな展示はできないものかと素人ながらも考える。

「教育は人なり」といわれるように博物館の管理運営も人にある。私どもに課せられた課題の重さ、大きさは計りしれないものがあると思うのが、いつわらざる心境である。



特殊器台胎土の位置づけ

学芸課長 高橋 護

特殊器台、特殊壺が、特異な胎土から成っていることは、早くから気付かれ、注目されていた。ことに、特殊器台の広域な分布が知られてくるにつれて、その胎土のはらむ問題は大きな関心を集めることとなった。ことに大阪平野における生駒西麓産の粘土を使用した土器の分布が問題となつてから、いわば産地問題に集約された形で関心が広がっている。しかし、吉備地方における弥生時代の土器造りの伝統は、それほど単純にことを運ぶことのできるものではない。このノートでは、弥生時代土器造りの伝統からみて、特殊器台製作に使用された胎土の位置づけを考えてみたい。

一般に土器胎土に関する分析にあたって、実は、かなりやっかいな問題がひかえている。それは、各遺跡、各時期の土器胎土が決して一様でなく、かなり多様な組成を示していることであり、その上に、研究者のほとんどが、それに注目していないため、基礎データが欠けていることである。ずい分以前から、土器の観察には、実体顕微鏡か、せめて高倍率のルーペを用いないとだめだと若い研究者たちについてきたが、ほとんど実行する者はいないのが実状である。

顕微鏡下にみられる土器の胎土の様子は、かならずしも整然と区分することのできる状況を示しはしない。ことに旭東平野における後期の土器では、個体による差違が大きく、不可解な様相を示している。この違ひは、百間川原尾島遺跡井戸16出土土器のような良好な一括資料においてもみられる。それは、上東式土器のなかでも、土器造りの最もよく発達した旭東平野地域の特色であり、土器製作のための土づくりの複雑化に伴う現象で、いわば、土器造りの発達の帰結といってもよいだろう。

上東式土器期の旭東平野の土器胎土は、通常、基質の灰白色シルト質粘土と川砂の粗砂を基本にし、それに丘陵地より採取したと考えられる細砂を含む風化土壌が加えられている。個体間の胎土の違ひは、主として添加される風化土壌の量と質によって左右されている。この山土の中に含まれているものは、粒度の点では、粗砂から粘土までの幅広い分布をもっていたようであるが、ことに細砂付近の粒径を示すものは、すべてこの土に由来すると考えられる。

旭東平野において、土器胎土中に含まれているホルンブレンドは、山土の成分として持ち込まれたと考えられるも

ので、粗砂中に含まれていたと考えられるものは極めて稀である。細砂成分中のホルンブレンドの占める比率は、一様でなく、大きな巾で変動を示すことからみて、山土の採取地を特定の地点に求めることは適当でない。それは、同様に、山土中に含まれていた赤色酸化粒や赤色化砂粒の含有状態からも考えられることである。

個々の土器についてではなく、土器群の全体をみた場合、ホルンブレンドや赤色酸化粒を多量に含む山土を、大量に混合した土器は、壺形土器にかたより、その反対の特徴を示す土器は、かめ形土器にかたよってあらわれる。ことにいわゆる製塩土器とかめ形土器の一部では、山土が混合されていないと推定される土が使用されている。

こうした状況からみて、山土の赤色風化土の混合は、土器製作の技術上の問題というよりは、むしろ、焼成された土器の色調を赤褐色にする目的か、あるいは、呪術的な意味合いの強いものであったろう。

旭東平野のこのような土器作りに対して、上東遺跡の土器造りは全く違った様相を示す。ここでは、土器の胎土はほとんど山土によって占められている。基質に特別の粘土が配合されたか、否か問題であるが、微砂成分の状況からみると、ほぼ同質の風化粘土であったと考えられる。使用された土は、ホルンブレンドの多い山土で、遺跡北方の石英閃緑岩の山地の地表土であると考えられる。粗砂成分についても、ほぼこの山地の山砂と考えられ、胎土のすべてがこの山地からもたらされたようである。粗砂中に、稀に円磨された小礫をまじえるが、際立って円磨度が高く、山地表面に稀に遺存する古い礫層中のものと考えてよいだろう。

変った胎土のものとしては、多量の火山ガラスを含んだ胎土で、なかには、土器というよりは、ガラス器と呼びたくなるような例もある。通常、山土中に含まれる火山ガラスの量は、さして多いものではない。大量にガラスを含む胎土では、基質粘土としてガラス質火山灰そのものが使用されていると考えられる。上伊福遺跡採集の高坏片の一つに、山土と基質粘土の混合が充分でなく、その様子をうかがわせるのがみられる。酒津遺跡の酒津式土器など、火山ガラスの多いものは、こうした例に属するものである。

弥生土器一般の製作にあたって、しばしば添加される山地の風化土には、ホルンブレンドが相当量入っていることがみとめられる。こうした土は、旭東平野についてのみ言えば、遺跡付近の山地では採取不能な性質のものであり、土器製作のために、他地域より搬入された原料であったと考えなければならない。

弥生土器ブローパーに対比して、特殊器台、特殊壺の胎土は、肉眼でみても一見して、それと区別できる特有の胎土をもっている。特殊器台の胎土として典型的な胎土をもつ向木見遺跡の例でみると、この胎土の特色は、ホルンブレンドを多量に包含していることである。ホルンブレンドの量は、石英閃緑岩の風化土を使ったと考えられる上東遺跡の土器と比較しても、はるかに多量に含まれており、この胎土が、特殊な土であったことを示している。

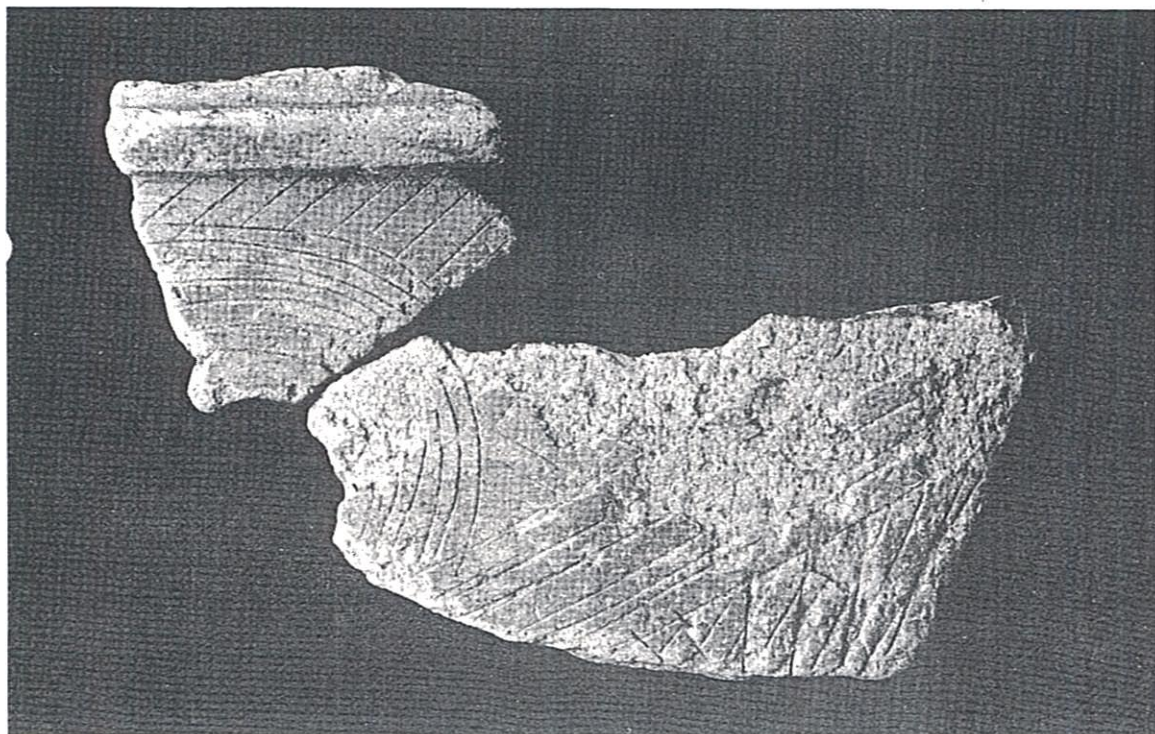
特殊器台の胎土が、やゝす黒い褐色で独得の色調を示しているのは、一つには大量に含まれるホルンブレンドによるものである。ホルンブレンドの粒は、粗砂から微砂にわたる巾広い粒径を示し、粒子の状況も著しく風化をうけた様子を示している。色調をつくり出しているもう一つの要因は、これも胎土中に多量に含まれている赤色酸化粒と赤色化した砂粒である。ことに、微砂質の石英砂粒に大量に赤色化したものを含んでいることが注目される。これらの事実は、この風化土が、強い赤色土化を受けたものであることを示すもので、一般の土器製作以上に赤色化した風化土を用いていたと考えられる。向木見遺跡の特殊器台、特殊壺の製作にあたって、基質粘土や粗砂が加えられた形跡はあまり認められない。荒い砂粒を含むこともあるが、ほとんど同質の砂粒であり、風化土の採取にあたって当初

から混入していたと考えて支障ない砂粒のみである。

ところが、特殊器台の胎土は、常に向木見遺跡の例のように、多量のホルンブレンドを含んだ土で造られているのではない。しかも、それはかならずしも遺跡のある地域とも関係していないのである。宮山遺跡の特殊器台、特殊壺は、いずれも向木見遺跡の様相と同様の胎土組成を示すが、すぐ隣にある柳坪遺跡では、ホルンブレンドの含有量は多くない。しかも、これもまた至近にある三輪山天狗松遺跡出土の特殊器台胎土になると、ホルンブレンドの量はさらに少なく、ごく少量の含有がみとめられるにすぎない。この特殊器台は、A型のS字形連続渦文を有する器台で、同時に採集された土器片はIX-b期のものである。

ホルンブレンドの含有率の低いこの個体でも、胎土中に含有されている赤色酸化粒や、赤色化した砂粒は多量にみとめられ、胎土づくりにあたって、多量の赤色土が混合されていることを示している。

これらのことを総合すると、吉備地方南部平野では、弥生時代後期に、壺形土器、小形土器を中心に、胎土に赤土を混じえることが一般化していたが、なかでも特殊器台、特殊壺の胎土には、強く赤色化した土が使用され、向木見遺跡や、宮山遺跡の例では、ほとんど赤土のみで造られていると考えられる。



総社市三輪 天狗松出土特殊器台

新収蔵資料紹介

赤松家文書

赤松氏は鎌倉時代のはじめ則景（則村の4代祖）が播磨国佐用庄の地頭となってその地に土着したと伝えられる武士団で、その名が歴史の舞台に登場するのは鎌倉幕府滅亡、建武政権成立の過程で赤松則村が幕府追討の先鋒として活躍して以後のことである。

足利尊氏が建武政権から離反すると、則村は尊氏に属して、則村が播磨、嫡子範資が摂津、二男貞範は美作の守護に補せられている。さらに則村、範資没後赤松氏の惣領職と播磨守護を継いだ則祐は備前守護に補せられ、その子義則は播磨、備前、美作3国の守護を兼ね、幕府の侍所所司にもなって、室町幕府の中樞に重きをなした。しかし義則の子満祐が將軍義教を殺して追討され、赤松嫡家は一時没落、応仁の乱のころに政則によって再興されるが、その後は守護代浦上氏などの抬頭によって次第に勢力を失なった。

新収蔵の赤松氏関係文書は貞範から分かれ、丹波国春日部庄に本拠を置いた赤松春日部家の系譜に属するものと思われる20点である。この中に足利義教袖判御教書1通がある。内容は赤松次郎教員に播磨国米田村、備前出石郷、平瀬郷、美作国高鳥庄、豊国庄などの所領を充行うというもの。永享12年（1440）3月12日付、嘉吉の乱の前年のものである。

義教は室町幕府の6代將軍。その治政は室町時代を通じてもっとも將軍の専制権力の強かった時期といわれるが、

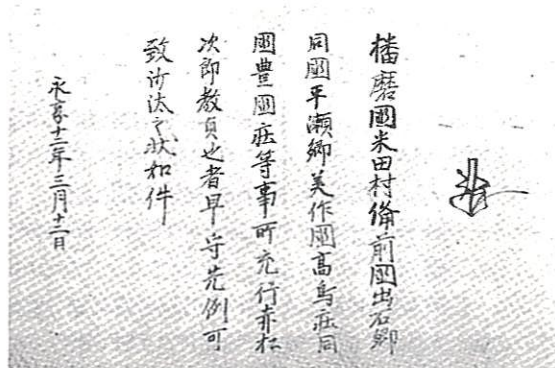
逸見東洋作軸受盆

東洋は弘化3年（1846）岡山下之町に生れ、本名は大吉といった。文久2年（1862）に京都に出て、岡崎源五右衛門助隆について、刀工の修業をし、

竹貫斎義隆と称していたが、明治正宗とも云われる程になった。

しかし明治5年の廃刀令を境にして刀工をやめ、金工家正阿弥勝義に師事し、彫金技術を習得し、彫りにもその才を伸ばし、しばしば本物以上の習作を作り、世間を驚かせた。その後さらに、彼は独自に木彫漆芸の技法、領域に踏み込み、ここにある堆黒はもちろん、堆朱、堆白にまで及び、今度は金工芸の勝義に対し、木彫漆芸の東洋と並び称されるようになった。その多方面の技を駆使した精巧な技法は中国のそれとはもちろん味の違ったもので、他に追従を許さないものがある。彼の強力な支援者は「白鶴」の嘉納治兵衛、「住友」の住友吉左衛門、「鴻池」の鴻池新十郎などで、多くの作品を所有していた。

この作品は雲、鷺、蓮、蘭、野菊、飛虫を全面に配した



足利義教袖判御教書 永享12年

それは当時の世情がきわめて不安定で、義教がこれに専制的な強権を掌握して対処しようとしたためだと思われる。鎌倉公方持氏の滅亡、若狭・三河・丹後守護一色義貫、伊勢守護土岐持頼の滅亡など、義教の意に添わなかった武士勢力が次々に滅ぼされるという義教の弾圧政策の中で、嘉吉元年、赤松満祐が義教を弑逆する、いわゆる嘉吉の乱は起った。当時播磨、美作、備前3国の守護であった赤松満祐ははじめ義教に重く用いられたが、義教が赤松春日部家の貞村を寵愛するようになると次第に遠ざけられ、永享12年3月に弟義雅が義教の不興をかって所領を没収され、その一部が貞村らに分与されるに至ったことは、満祐の義教殺害の大きな要因となったと考えられる。

この御教書によって所領を充行われた赤松次郎教員が貞村の嫡子であることを考えると、この文書は嘉吉の乱に関わる重要な意味を有する史料ということが出来るのである。



逸見東洋作 堆黒軸受盆

図柄で、空間の少ないものである。同じ大きさの野菊の花芯二つのうち一つはあえて抽象図形化して変えてあるのも単なるリアリズムではない彼の特長を表わしている。堆黒部分の厚さは2mmで約60層位に塗り重ねてある。本体表面に非常に小さく「東洋」と銘を入れ、箱に「堆黒風月三昆之図軸置」その裏に「逸東洋老人製印」とある。

33.5×10.9×2.7cm（長・幅・高）

岡山県立博物館だより

No.23

発行日 昭和60年1月31日
 発行所 岡山県立博物館
 館長 友野澄雄
 岡山市後楽園1-5
 電話(岡山) 72-1149